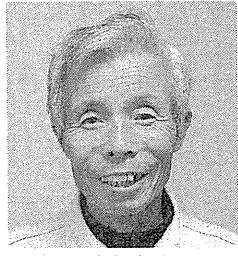


内野治さん



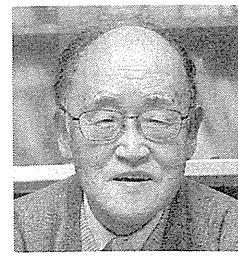
滝瀬秀夫さん



原島重夫さん



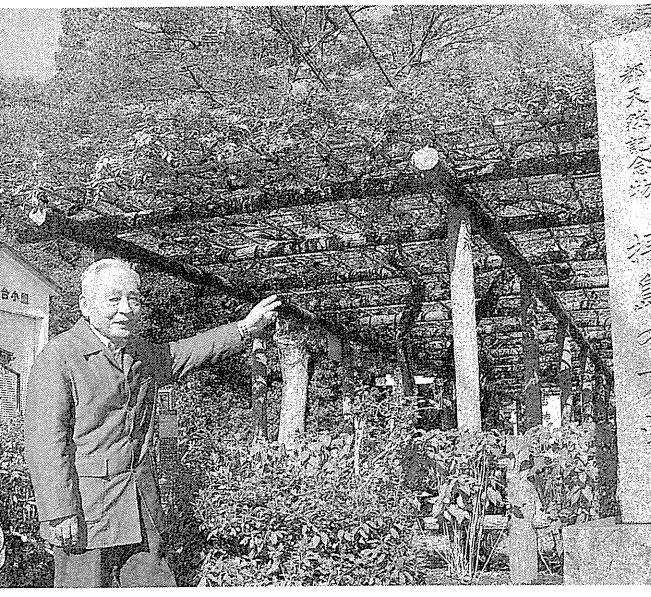
橋本昇さん



橋本良三さん



薬袋徳行さん



❶「フジの花も少しずつ戻ってきました。愛情をかけて地域で育てていきたい」と話す大野伊左男さん(左)・榎祭などで有名な昭島市拝島町の日吉神社



同組合専務理事の薬袋徳行さん(45)は、「フジを枯らさなければいい」というような単純な問題ではない。立派な花を咲かせなければ再生したとは言えない」と力を込める。皆の思いが通じたのか、房の数は微増し花を咲かせるようになってきた。今年は、地域住民らが生け垣としてガクアジサイを植えた。

大野さんは「フジは街の宝。大切に育てて、多くの人が花見に来るような場所にしたい」と強調した。

特徴だ。  
瑞穂町石畑で人形製造販売業を営む内野治さん(44)は、1年間に約1万個のだま作りを家業としており、内野さん自身、10歳の頃には参道でだるまを売る家族の手伝いをしていたといふ。「親類からお年玉をもらったりことはなかったが、お客さんから『これやるよ』と差し出された500円札が心に残っている」と当時を懐かしむ。

だるまの大きさや値段は様々で、高さは7~65cm、値段も数百円~5万円まで幅広く用意する。売れ筋は1000~3000円の商品だ。個々のだるまには「購入する人たちの家内安全、無病息災を祈りながら作っています」という内野さん

の願いが込められている。拝島大師のすぐ前に店を構える菓子店「元木屋」は、1914年の創業だ。95年間にわたり、地元で親しまれてきた。卵や小麦を使って焼き上げた「開運せんべい」は創業以来の味を守る。せんべいは、創業者の滝瀬梅五郎さん(故人)が人々の開運を祈って発案したといい、小判やだるまがかたどられている。現在の店主

で梅五郎さんの孫の秀大さん(62)は、「これからも、昭島の歴史をお菓子を通じて発信していきたい」と抱負を語る。

伝統行事の「榎祭」では、お囃子やかけ声が、街道沿いに響き渡る。鉢巻きを巻いた男たちが、榎を載せたマックスの「榎取り」は、

語る。日吉神社の榎宣を務める橋本昇さん(56)は、「榎祭は、拝島にとって最大のイベント。地域住民の1年は祭りを中心と動いています」と説明する。祭りが終われば、数日後には翌年の出場者を決め、笛や太鼓の練習を再開したり、榎に載せる榎を探しに出かけたりと、準備を始める。「伝統ある祭りなので、

う街道から神社や寺の境内に足を踏み入れると、辺りの雰囲気は一変する。鳥居や祠がひっそりとたたずみ、静寂の中、鳥のさえずりが聞こえてくる。そんな場所も、新春恒例の「だるま市」と9月の「榎祭」の時期は、大勢の人で埋め尽くされ、にぎわいを見せる。

だるま市は、江戸時代後期に周辺の養蚕農家が蚕の病気を防ぐためにだるまを売ったのが始まりとされる。毎年、拝島大師の参道には數十軒のだるま店が並び、参拝客に「安くするよ」などと声をかける。ここで売られる東京だるまは、鼻が高く、目の縁が金粉や金箔であしらわれているのが

バスターミナルが行き交

# 歩けば

昭島市拝島町周辺の奥多摩街道沿いには、拝島大師や白吉神社など古式のかしい神社仏閣が残る。そこで昔から受け継がれる四季折々の行事が催され、元の人たちの心のより所となっている。(阿部新)

## 奥多摩街道

(昭島市拝島町)

平日の昼間でも、人の姿が見えない」ともある(昭島市拝島町で)

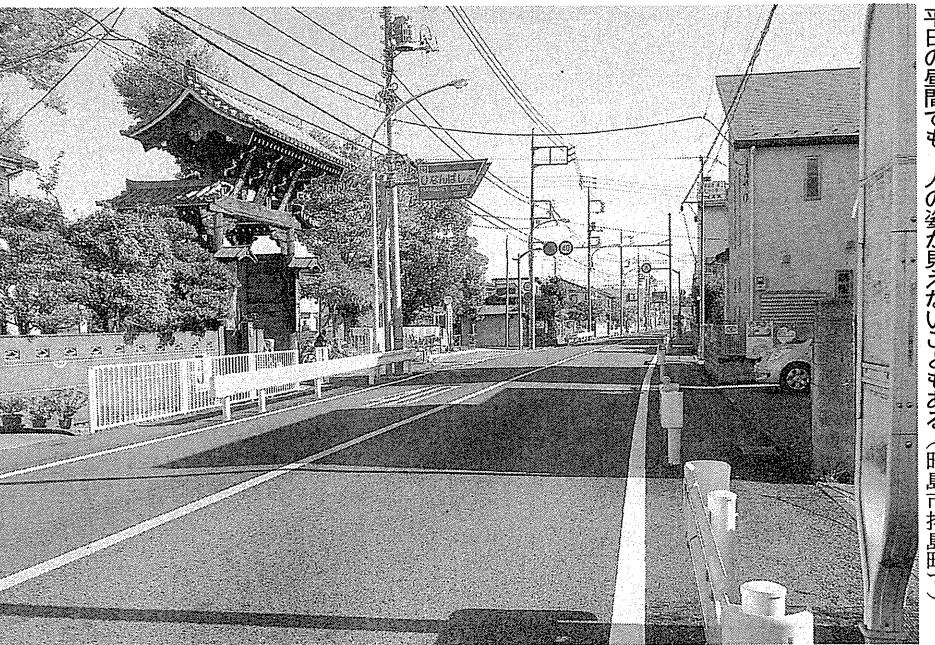
住民らが榎の枝を奪い合

う。枝を手に入れると、無病息災で一年間を過ごすことができるという言い伝えがあるからだ。

拝島日吉神社祭礼囃子保存会会長の原島重夫さん(64)は、「祭りは江戸時代から受け継がれてきた行事。後世に引き継ぎたい」と思い、伝統を守り続けている。約45年前、行政側が難色を示し、存続が危ぶまれたことがあった。奥多摩

街道で深夜に神輿が練り歩くために長時間の交通規制が必要で、交通に支障をきたすという理由からだ。しかし、関係機関に何度も足を運び、説得した。原島さんは「みんなで問題を解決し、伝統を守ってきた。地域住民が結束しているのは、祭りのおかげです」と

ました。私も大好きです」と目を細める。



## 榎祭保存へ住民結束・千歳のフジ再生

減り、枝も細

つた。「これ

がフジですか

?」と尋ねる

寺社が並ぶ拝島公園の一角には「千歳のフジ」が約260平方㍍のフジ棚に枝を伸ばしている。樹齢は約800年とされ、1956年には都の天然記念物に指定された。しかし、十分な手入れが行われなかつたため、房は年を追うごとに

いる元拝島郵便局長の榎本良三さん(86)は半世紀にわたり、街道の風景や人々の暮らし、祭りなどを撮り続けている。これまでカメラに収めたカットは2万点に及び。1990年には父の高亮さん(故人)が撮影した写真と合わせて「昭和の多摩」と題した写真集を出版した。榎本さんは「私はこの街に愛着を感じていました。私も大好きです」と目を細める。

拝島周辺の歴史を研究している元拝島郵便局長の榎本良三さん(86)は半世紀にわたり、街道の風景や人々の暮らし、祭りなどを撮り続けている。これまでカメラに収めたカットは2万点に及び。1990年には父の高亮さん(故人)が撮影した写真と合わせて「昭和の多摩」と題した写真集を出版した。榎本さんは「私はこの街に愛着を感じていました。私も大好きです」と目を細める。